

留欧美術学生

——近百年來中国絵画史研究 六——

鶴田武良

はじめに

一、留欧美術学生—李鉄夫・李毅士・馮鋼百・徐悲鴻—

二、海外藝術運動社、中華留法藝術協会、中國留法藝術學會

資料1 『中國留法比瑞同學會總會同學録』所載、留欧美術学生名單

資料2 『中國留法比瑞同學會總會同學録』外、留欧美術学生名單

はじめに

民国期及び解放（一九四九年一〇月）後の油画と美術教育の發展が、日本あるいは欧米に留学した美術学生に多くを負っていることは早くから知られている。

日本留学の美術学生については、前稿「留日美術学生」で紹介したので、本稿では主要なヨーロッパ留学美術学生とその美術運動について紹介し、合せて留学生名簿を資料として附した。

一、留欧美術学生—李鉄夫・李毅士・馮鋼百・徐悲鴻—

近代中国の海外美術留学は李鉄夫に始まる。李鉄夫の経歴については詳しくは分からないが、遅軻編『李鉄夫』⁽¹⁾及び劉新著『中國油画百年図史』⁽²⁾によると、ほぼ次のようである。

留欧美術学生

李鉄夫は一八六九年（同治八年）、広東省鶴山県陳山村の貧農の家に生れ、原名を昭龍（一説に玉田）といった。八歳から十四歳まで、同郷の孝廉について詩文、書画を学び、一八八五年十六歳の時、叔父の援助を得て、恐らくは勤工儉学を志してカナダに渡ったが、一八八七年英国アーリントン美術学校に入学、一八九一年に卒業した。その後数年間の動静は不明であるが、一八九六年から一九〇五年にかけては、興中会に参加し、孫文に従って民主革命の宣伝工作を行った。一九〇五年ニューヨークに移り、ジョン・シンガー・サージェント（一八五六一一九二五）に肖像画を学び、それはサージェントの没するまで続いた。

一九〇九年二月、中国革命同盟会ニューヨーク分会が成立すると常務書記となり、一九一四年まで勤めた。その間一九〇八年から一九一一年にかけてウィリアム・マリーット・チェース（一八四九—一九一六）にやはり肖像画法を学び、サージェントからと同様に大きな影響を受け、後年、名刺にこの二人の名を記し、その「FOLLOWER」と印刷している。このころ、一九一〇年前後、ニューヨーク芸術学生連盟（Art Student League of New York）副教授として肖像画を教えた。一九一三年、ニューヨーク芸術大学に入り、さらに肖像画と彫塑を学んだ。一九一六年、ニューヨーク国際芸術設計学校

(International Academy of Design) に加

入してから創作活動が主になった。

一九三〇年、アメリカから広州に帰ったが、三二年に香港に移って売画生活を始めた。しかし、当時の香港では作品はあまり売れず、生活は苦しかったようである。解放の翌年、

挿図2 李鉄夫「未完成老人像」

一九五〇年八月、ふたたび広州に帰り、華南文芸学院名誉教授、華南文学芸術界連合会副主席に就いた。一九五二年六月、八十三歳で広州

挿図1 李鉄夫「音楽家」 1918年作

い油画感性を身につけた画家であった。しかし、李鉄夫が帰国した一九三〇年には、上海美術專科学校、国立北平芸術專科学校、国立杭州芸術專科学校、国立中央大学芸術学系に代表される美術教育機関がすでに整っていて、そこでは日本やヨーロッパに留学した画家によって、ヨーロッパ・アカデミズムに基づいた美術教育が、確立されていた。しかも二年後には香港に移ったから、李鉄夫が中国の油画教育に寄与することはほとんどなかった。

二人目の美術留学生は李毅士である。『中国油画百年図史』によると、李毅士（一八八六—一九四二）の経歴は次のようである。

李毅士は原名を祖鴻といい、江蘇省武進の代々知識人の家に生れ、父李宝章は同治一二年（一八七三）の挙人で浙江候補道に任じ、山水、花卉を善くして画家としても名があった。また叔父李宝嘉は清末の官界の内情を描いた『官場現形記』の作者として知られる。

一九〇三年（光緒二十九年）、李毅士は二人の兄弟と日本に行き、兄弟二人は法律学校と士官学校に入学したが、李毅士はそのような官界への道を好まず、翌一九〇四年英国グラスゴーに行き、半工半読生活の後、一九〇七年グラスゴー美術学院に入学した。一九一二年に同学院を卒業すると、成立したばかりの中華民国政府の科学専攻公費留学生の資格を得て、グラスゴー大学物理系に入学し、一九一六年に卒業した。同年秋帰国すると、北京大学総長に就任早々の蔡元培に迎えられて北京大学理工学院教員となり、ついで一九一八年には北京大学画法研究会黑白画導師になった。一九二一年にやはり北京大学画法研究会西画導師の留仏画家呉法鼎、台湾出身で、その年東京美術学校西洋画科を卒業して北京に来た王悦之（原名・劉錦堂）と阿博洛（アポロ）学会を組織したが、二四年に呉法鼎が亡くなり、李毅士が上海に移ると

で没した。

現存する一九一八年作「音楽家」（挿図1）及び「未完成老人像」（挿図2）からも知られるように、李鉄夫は近代中国で最も早く油画技法に習熟し、鋭

会は消滅した。

挿図3 李毅士「科学と藝術」
教育部第一次全国美術展出品

李毅士は、一九一九年に北京高等師範学校 図画手工専修科西画教授と北京美術専門学校 西画科主任を兼任、一九二四年には劉海粟に招かれて上海美術専門学校教務長兼透視学教授となった。ついで一九二六年に南京高等師範学校工芸科技法理論教授を兼任、一九二七年には蔡元培の推薦によって南京国立中央大学教育学院芸術科西画教授兼任となり、二

挿図4 李毅士「宮怨」 1933年作

九年、同大学工学院建築系教授を兼任した。しかし、教育学院の人事抗争を嫌い、一九三〇年教育学院教授を

挿図5 李毅士

「小紅低唱し、我れ簫を吹く」
教育部第二次全国美術展出品

九年、同大学工学院建築系教授を兼任した。しかし、教育学院の人事抗争を嫌い、一九三〇年教育学院教授を

辞し、工学院専任となった。一九三七年、日中戦争の勃発によって始まった中央大学の疎開で重慶に移ったが、大学から排斥されて三九年に辞職、売画生活に入った。四二年、国民党軍の西南行営主任として桂林に駐屯していた白崇禧に招かれて桂林に写生に行ったが、そこで発病、亡くなった。

この経歴が示すように、李毅士はヨーロッパの油画教育法を中国に最初に伝えた美術留学生であった。しかし、彼が実践した美術教育法については、今では知る方法がない。現存する作品も少なく、彼の画歴と画技を検証するには十分ではない。一九二九年の教育部第一次全国美術展覧会に出品した「科学と芸術」（挿図3）は、李毅士が象徴主義に関心を持っていたことと、中国でそのような作品を制作した早い画家であることを示している。一方、一九三一年作「宮怨」（挿図4）は白居易の「後宮詞」の詩意を主題としたものであるが、画面の片側上方の窓から入る光、あるいは明りを受けた室内の情景を描いた本図の構図は、ルネッサンス以後のヨーロッパ絵画によく見られるものである。「宮怨」は、一九三七年の教育部第二次全国美術展覧会に出品した「小紅は低唱し、我れ簫を吹く」（挿図5）の明暗法、立体感の表現とともに、李毅士の関心が主にヨーロッパの絵画の明暗法を中国画に取り入れることにあったことを示している。

李毅士の明暗法に対する関心が最もよくわかれるのは、一九二〇年代初に構想し、二九年に完成したという「長恨歌画意」三十図（挿図6）である。「長恨歌画意」は、白居易の「長恨歌」の詩意を三十図に分けて描いたもので、各図とも長辺二三センチ、短辺一六センチの、中国で図画紙あるいは素描紙という、やや厚手の紙を縦または横にして、水粉画の黒色と白色の顔料を用い、灰色を主にしている。今は淡黄色に見える部分は図画紙の地の



插图6 李毅士「長恨歌画意」 1929年作

経年による変色で、絵具は黒色と白色の二色のみである。背面には画因となった「長恨歌」の詩句と番号の数字が記されていて、李毅士の自書と考えられる。それを長辺四二センチ、短辺二八センチの元書紙のほぼ中央に貼り、元書紙の余白にはもとの詩句をさまざまな書体で記してある。それは先に白色で下書きをして、その上から黒色で書き直したもので別人の手と思われる。なお、第一、八、九、十一、十二、十四、十九、二十一、二十二、二五、二七、二八、二九、三〇図に「李毅士」と款書がある。いずれも風景や建物、室内の状況に人物を組み合わせた図柄であるが、すべての図に共通しているのは、明暗と立体感に対する強い関心である。一見、写真と見誤るほどのこの写実性こそ、徐悲鴻が早くに中国画の欠点に挙げて、「中国画改良」の目標としていたものである。「長恨歌画意」は、李毅士の「中国画改良」の成果の徴証である。これまで李毅士の西洋画法の中国画への応用、あるいは中国画改良に対する貢献については誰も触れていないが、「宮怨図」「長恨歌画意」を見ると、ヨーロッパの明暗法を中国画に応用した画家としては、最も早く、最もすぐれた画家であったといえよう。

なお、「長恨歌画意」三十図は、解放後間もなく遺族から上海市文化局に寄贈され、のちに中国美術館に転贈されたものである。機会を得ることが出来れば改めて全図を紹介したい。

第三人目の留欧米美術学生は馮鋼百である。

馮鋼百（一八八四—一九八四）は広東省新会県の人。家が貧しかったため、十四歳のとき広州に出て半工半読生活をしながら袁祖述に人物肖像画法を学び、十八歳のときには肖像画家としてくらすことが出来るようになった。写真がまだ一般的でなかった当時の中国では、肖像画の需要は多く、画家とし

て生計を立てる上では肖像画家になることが、最も安全な選択であった。一九〇六年メキシコに行き、メキシコ国立美術学院に入学、一九一〇年に卒業すると、翌一九一一年サン・フランシスコに行きブジャーリ（ト忌利）美術学院に入学したが、一年半後、シカゴ美術学院に転じ、さらにニューヨーク九番街学生美術研究会で肖像画を専習した。その間、ロバート・ヘンリ（一八六五—一九二九）に人物画を学んだ。

一九二一年に帰国して、広州で胡根天と広州市市立美術学校を設立し、校務主任となった。また、同年、胡根天と赤社を組織したが、同社は一九三五年解散を余儀無くされた。一九三八年香港に移り、間もなく重慶に行ったが、そこで国民党に拘束され、一九四五年抗日戦争が終わってから釈放された。一九四八年再び香港に移ったが、広州解放後、広州に戻り、広東省文史研究館副館長、広東省文連委員、広東美協分会理事などを歴任した。

馮鋼百の特色は、彼の学画の過程が示すように、肖像画である。ここには一九二九年の教育部第一次全国美術展覧会に出品した「自画像」（挿図7）を掲げた。彼の一九三〇年代の作品に「馬夫（馬丁）」、「洗衣工」、「工匠」といった画題があり、早いころから社会主義的題材に関心を寄せていたことが知られる。赤社への関与とともに、それが国民党の注意を引くことになった原因のひとつであろう。

馮鋼百が中国で美術教育に関わったのは広州市市立美術学校在任時の数年であって、特別の業績は伝わらない。

李毅士に続く、主な留欧美術学生は次の通りである。

- 一九一一年 吳法鼎—フランス
- 同 李超士—イギリス（翌年フランスに）
- 一九一四年 梁竹亭—カナダ
- 同 彭沛民—イギリス
- 一九一九年 徐悲鴻—フランス
- 同 李金髮—フランス
- 同 曾一櫓—フランス
- 同 林風眠—フランス
- 同 林文錚—フランス
- 一九二〇年 常玉—フランス
- 同 孫福熙—フランス

一四〇名近い民国期留欧美術学生の中で、民国期、解放後を通して、中国の美術教育の発展に最も大きな役割を果たしたのは徐悲鴻である。徐悲鴻については、作品集を別にしても、近一〇年ですでに十数点の研究書が刊行されているし、期刊掲載の論文も相当な数に上るが、その経歴は「悲鴻自述」⁽³⁾に拠るところが大きい。本稿でも「自述」を主にして、徐伯陽・金山合編『徐悲鴻年譜』⁽⁴⁾によって補いながら、画業について簡単に述べておきたい。

徐悲鴻は一八九五年（光緒二十一年）江蘇省宜興県に生れた。原名は寿康。祖父硯耕は村で裁縫師をしながら、数畝の田を耕していたというから貧農で

あった。父達章は幼いころから絵画を好み、身近にある物を描いて喜んでいが、長じて画家となり、さらに独学で村塾の教師となった。また、書、篆刻をも善くした。

徐悲鴻は、六歳から父について四書を読み始め、七歳から書法を学んだ。九歳で四書五経を読み終えると、吳友如の界画人物画の模写を日課とするようになり、やがて彩色を習い、十歳のときには、父の絵のあまり重要でない部分の彩色を父に代わってするほどになった。

十三歳（一九〇八年）のとき、水災で田畑を失ったため、父と無錫、蘇州、溧陽一帯を歩きながら父が肖像画や山水・花卉を描き、刻印をして生活を送った。このころ、タバコの箱の動物の絵や日本の博物標本画を見て動物画に興味を持つようになり、その模写を始めた。

十七歳（一九一二年）のとき、始めて上海に行き、サーカスで生きているライオン、虎、豹などを見て、西洋画を学ぼうとしたが方法が分らず、宜興に帰り、数ヶ月後、和橋鎮彭城中学の図画教員となり、十九歳のときには和橋鎮始齊女学校と宜興初級師範学校の図画教員をも兼ねた。一九一五年（二十歳）の夏、三校の教員を辞し、半工半読生活を求めて上海に出た。翌年、同郷の知人の援助を受けながら震旦大学に入学、フランス語を学んだ。このころから高剣父、高奇峯兄弟の審美書館の出版物や新聞広告の絵をかくようになった。また、この年（一九一六年）上海で事業に成功したユダヤ系英国人欧愛司・哈同（Slias Aaron Hardoon、一八四七—一九三二）の支配人姫覚彌（？—一九三三）の紹介で哈同花園（愛麗園）に住み、園内の美術装飾を担当するとともに、園内に設立された倉聖明智大学の美術教授になった。そこで康有爲、王国維、陳三立（散原）、鄒安らと知り合った。のちに最初の妻となる蔣碧微を知ったのもこの年である。

翌一九一七年(二十二歳)五月、姫覚彌から千六百金を贈られ、東京に行った。東京での生活については「悲鴻自述」に

一略—既に東京に抵る、乃ち鎮日、藏書処を覓めて観覽す、頓に覚ゆ、日本作家は漸く能く積習に拘守するを脱去す、造物に会心するは、務めて博麗繁郁の境たり、故に花鳥尤も勝場を壇にす、蓋し徐(熙)、黄(筌)、趙(昌)、易(元吉)を追蹤せんと欲して、吾席を奪ふ、是れ沈南蘋の功なり、惟、華にして薄、實にして韻少なし、太だ目を奪はんことを求めて、蘊藉樸茂の風なし、是の時、寺崎広業尚在り、頗る其の作を愛す、而して未だ其の人を見ざるなり、中村不折を識る、彼、因って託するに訊せし所の南海(康有為)が『廣藝舟雙楫』、更の名『漢魏書道論』を南海に致さんことを以てす—略—吾れ、日本に居りしとき、盡く資を以て書及び印刷品を購ふ—略—

と見えることと、その時一緒に日本に行った蔣碧微が、のちに東京での生活を回憶して

一略—日本の印刷術は優美精良で、日本で出版する芸術図書はかなり多く、その外に絵画の複製印刷がたくさんあった。それら総てを徐(悲鴻)先生はこの上もない宝ものと見なした。先生はいつも書店に行くと、ゆっくりと見て、気に入ったものを見付けると迷わず買った。—略—わたしたちは東京で半年暮した。旅費と生活費に使ったのは多くなかった。むしろ、徐先生が大量に買った本や画のお金に沢山使った。そのため持って来た二千元のお金はすぐになくなった。—略—と述べているだけである。二人のこの記述から、徐悲鴻が東京で多くの美術書や複製印刷画を購入したこと、中村不折を識ったこと、寺崎広業の作品を見る機会があったことなどが知られる。しかし、不折は徐悲鴻について何も

言い及んでおらず、二人の交遊の程度は分らない。

六ヶ月後の一九一七年十一月、二人は上海に帰ったが、康有為の勧めでヨーロッパへの官費留学の途を求めて、十二月に北京に上った。翌年三月、北京大学総長蔡元培に招かれて、発足したばかりの北京大学画法研究会(6)導師になった。そこで、徐悲鴻は賀良樸、湯定之、李毅士など多くの画家を識り、また故宮所藏名画に触れることが出来た。

一九一八年五月十四日、徐悲鴻は画法研究会で「中国画改良之方法」と題して講演をした。それは、

中国画学の頹敗、今日に至って已に極まれり、凡そ世界文明の理は退化することなし、独り中国の画、今日に在りては、二十年前に比べて退くこと五十歩、三百年前より退くこと五百歩、五百年前より退くこと四百歩、七百年前より千歩、千年前より八百歩、民族の振はざること慨くべきなり、それ、何故に画学をして此の如く頹壊せしむるや、曰く、惟だ舊を守りしのみ、曰く、惟だ其れ學術獨立の地位を失ひしのみ、画は固より藝なり、而して学に及ぶ、今吾が東方の画、其の二十世紀内に在るを論ずる無く、応に如何なる成績を有すべき、之を要するに以て視るに千年前の先民に逮ばざるは、実に深恥大辱たり、然れば則ち吾の此論を草するは、豈已むを得ん哉

に始まる、全文およそ二千五百字の短いものである。その中で徐悲鴻は、中国画の材料がヨーロッパに比べて劣り、中国画が明暗、立体感の表現法を欠くことを指摘して、「古法の佳き者は之を守り、絶へんとする者は之を継ぎ、佳からざる者は之を改め、未だ足らざる者は之を増し、西方画の採りて入るべき者は之を融く」といって、風景画と人物画について古画、古人を例に挙げて改良法を述べている。

この「中国画改良之方法」は、近代中国において、画家が提唱した、西洋画法の吸収による中国画改良論の最も早いもののひとつである。そこには中国画の持つ短所と、その改良の緊急性が簡潔に述べられていて、すぐに青年画家たちの指針となり、以後、繰返し引用されることとなった。それは、徐悲鴻の現代中国美術への貢献のひとつに挙げることが出来よう。「中国画改良之方法」の半年前一九一七年十月、康有為は『萬木草堂藏中国画目』を著わして「中国近世の画、衰敗極まれり」という句で「序」を始め、その「国朝画」では

中国の画学、国朝に至って衰弊極まれり、豈ただ衰弊のみならん、今に至るも郡邑に画人を聞くことなし、その遺余の二三の名宿は四王二石の糟粕を模写し、枯筆数筆、味は蠟を嚼むに同じ、豈復た能く後に伝わるも、以って今の欧美（米）日本と勝を競わんや、一略一郎世寧は乃ち西法より出ず、他日當に中西を合して大家と成る者有るべし、日本已に力めて之を講ず、當に郎世寧を以って太祖と為すべし、若し仍ち旧を守りて変ぜずば、則ち中国の画学、応に遂に滅絶すべし、国人豈英絶の士無からんや、運に應じて興り、中西を合して画学の新紀元を為す者、其れ今に在らん乎、吾れ斯に之を望む

と述べている。

清朝絵画を四王、つまり、王時敏、王鑑、王翬、王原祁の遺弊、あるいは糟粕とする見方は、民国初期、とりわけ五四運動のころの進歩的な人々に共通するものであった。康有為と徐悲鴻の論の共通点は、徐悲鴻が康有為に影響を受けたというよりも、哈同花園に集まる人々に共通する認識であったと見るべきであろう。徐悲鴻はそのような考えにふれた後、さらに北京で蔡元培に啓発されて「中国画改良之方法」をまとめたものと考えられる。

この年（一九二八年）十二月、徐悲鴻は教育部の官費渡仏留学生に選ばれ、翌一九一九年三月、蔣碧微を伴い、第一次勤工儉学留仏学生九十余人と一緒に上海からフランスに向った。五月、パリに着き、秋、アカデミー・ジュリアンに入り素描を学んだ。

一九二〇年五月、パリ国立高等美術学校に入学、課業の傍らアカデミー・ジュリアンに通った。十月、彫刻家ダンプ（Dampf）のサロンに加わってダニヤン・ヴーブレを紹介され、その指導を受けるようになった。

一九二一年七月、中国政府からの留学費の送金の遅れによる生活の逼迫から、パリに比べて生活費が安いベルリンに移り、間もなくキャンプ（Kampf）に師事した。一九二三年春、パリに帰り、再び美術学校に通った。

一九二四年秋パリを離れ、シンガポールを経て二六年二月上海に帰った。しかし、翌三月に再び渡欧、ベルギー、イタリア、スイスに旅行し、二七年九月上海に帰った。帰国当初は肖像画で生計を立てるつもりであったらしく、この年の冬、油画肖像の潤例を定め、胸像五百元、半身像七百元、全身像一千元とした。

一九二八年、南国芸術学院美術系主任、南京国立中央大学芸術系教授に任じ、十二月には北平大学芸術学院院长に迎えられたが、ここは翌年一月に辞めた。

一九三三年一月、パリ中国美術展のために渡仏、さらにミラノ、フランクフルトでも中国美術展を開催し、その間、パリ、ブリュッセルで自分の個展を開いた。

一九三四年四月、モスクワとレニングラード（サンクト・ペテルブルグ）での中国絵画展のためにイタリア、ギリシャ、イスタンブール経由でソビエトに行き、八月上海に帰った。このときのソビエト滞在で徐悲鴻は始めてレ-

ピン、スリコフ、セロフなどの作品に触れ、強い印象を受けた。また、画家グラバリ、ネステロフ、版画家グラフィチenko、彫刻家クニコフ、メルコロフらを識ったのもこのときであった。のちに徐悲鴻は、このソビエト旅行で最も印象的であったこととして、モスクワでもレニングラード（サンクト・ペテルブルグ）でも、どこの美術館でも労働者の観覧者が多いこと、兵士や労働者を描いた作品が多いことの二つを挙げている。

徐悲鴻がモスクワを訪れた一九三四年は、ちょうどソビエト連邦で社会主義リアリズムが打ち出された年であった。レーピンやスリコフ、セロフなどの写実的作品を目にし、また現に優勢になりつつある社会主義リアリズムを見たことが、徐悲鴻に大きな影響を及ぼしたようである。ソビエト旅行までの徐悲鴻の製作は、平均すると油画と中国画がほぼ半々であったが、帰国翌年の一九三五年は油画三点、中国画二十一点で、以後、油画は年一、二点、多くても数点という状況が続く。今は、徴証とするだけの作品資料を持たないが、若いときからの目標である西洋画の応用、吸収による中国画の改良、さらに中国画による社会主義リアリズムの実現といったことに、徐悲鴻の関心が移っていったためではないかと考えられる。

挿図8 徐悲鴻
「棒を持つ老人」 1924年作

一九三七年以後も、国立中央大学教授の職にあり、大学の疎開とともに重慶に移った。一九四六年八月、北平芸術専科学校校長に就任、

十月、北平美術家協会成立大会で主席に推された。一九四九年七月、北京で中華全国文学芸術界連合会が成立し、続いて中華全国美術工作者協会が発足すると主席に選ばれた。十二月、中央美術学院院長に任命され、在任中の一九五三年九月に没した。五十八歳であった。

徐悲鴻が、画家、美術教育家として他の多くの海外留学生に抜きん出ているところは、「中国芸術没落の原因は、偏に文人画を偏重したためである」ことを見抜いて、「古法の佳き者は之を守り、佳からざる者は之を改め、西方絵画の採りて入れるべき者は之を融く」ことを目的として油画を学び、フランス・アカデミズムの技法を中国に伝えたことである。教学の上ではヨーロッパ流のデッサン（挿図8）を重んじ、人物画を首位に置いた。一九三九年、徐悲鴻は内外画家の作品を図例にした「人物」三十一図、「風景」十五図、「静物」七図、「動物」三十四図から成る四篇の『画範』⁽⁸⁾を出版したが、序の代りに記した「新七法」に、一、位置得宜 *Mise en place* 二、比例位置 *Proportion* 三、黑白分明 *Clair-obscur* 四、動態天然 *Mouvement* 五、軽重和諧 *Balance de la Composition* 六、性格畢現 *Caractere* 七、伝神阿堵 *Expression* を挙げ、そこに付した解説でも「伝神の道は、まず精確を主とす」「科学の天才は精確にあり、芸術の天才亦然り」と、繰返し「精確」であることを求めている。彼はデッサンを「精確」を得るための手段と考えていた。徐悲鴻没後の一九五五年二月、中央美術学院はソビエト連邦からマキシモフを迎えて油画訓練班を開設した。そこでマキシモフはデッサン力を徹底して厳しく鍛え、それが六〇年代の中国油画の発展の基礎となった。マキシモフのデッサンに重点を置いた油画教育法が、徐悲鴻の美術教育者としての評価を高めたと考えられる。

徐悲鴻はまた、中国で歴史画を描いた早い画家である。先ず、フランスか

ら帰国の翌一九二八年、『史記』に題材を取った「田横五百士」(挿図9)の制作にかり、三〇年に完成した。続いて、『列子』をもとにした「九方臯」(一九三一年)、『尚書』に拠った「後我后」(一九三三年)を完成し、少しおくれて一九四〇年には「愚公移山」を制作している。何れも、当時の中国では例のない大作であった。このような彼の歴史画への関心はヨーロッパ留学によって引き起されたものであろう。歴史に対してだけでなく、現実の社会情勢にも大きな関心を持っていたようで、一九二八年五月、日本軍が済南を占領した「済南事件」が起きると、七月には「蔡公時被難図」を完成している。作品や著述には明らかに示されていないが、彼の中にあるこのような抗戦への姿勢と、彼の絵画への関心が主にヨーロッパのアカデミズムにあったことが、前衛に傾むくモダンアートをきらう解放後の政治指導者に好まれ、それが徐悲鴻が新中国で美術界と美術教育の指導的立場に就く原因のひとつとなったと考えられる。

欧米への美術留学は、一八八五年の李鉄夫、一九〇四年の李毅士、一九〇六年の馮鋼百を別にとすると、一九一一年から始まり、一九二〇年代に入って多くなる。一方、日本への留学は、一九〇三年の高剣父は別としても、一九

挿図9 徐悲鴻「田横五百士」 198×355cm 1928—30年作

〇五年の黄輔周からはぼ、毎年続き、ときには東京美術学校留学生に限っても一年に五名乃至七名を数えることがあった。それは、日本留学が平均すると美術学校修学期間だけで終わっているのに対し、欧米留学組には修学年限よりも長く滞欧する者が多く、一〇年近い者あるいは一〇年を越える者も少なくないこととともに大きな対照をなしている。ヨーロッパ留学組に長期留学者が多い理由は、日本留学組に比べて、大地主など、より富裕な階層の子弟が多かったからである。この出身階層のちがいが、ヨーロッパ美術に対する理解は日本留学組にはるかに勝るといって、ヨーロッパ留学組の自負、あるいは優越感と一体となって、両者の間に感情的な軋轢を生み、その対立は解放後にも及んだ。

ところで、ヨーロッパ留学生については、人名録や画集の解説に散見する以外、全体の状況を見渡す手掛がなかった。筆者は一九八三年の秋、北京で黄苗子氏から、ヨーロッパ留学生には同窓会名簿があると教えられたが、黄氏も伝聞によるもので、原本を披見したという人をこれまで知らず、所在も分からなかった。筆者は一九九六年一二月、北京潘家園の旧貨市場で『中國留法比瑞同學會總會同學録』を入手したが、それが黄氏のいうヨーロッパ留學生同窓会名簿に相当すると考えられる。

『中國留法比瑞同學會總會同學録』(挿図10、11、以下『留欧同学録』)は、その名称のように法(フランス)、比(ベルギー)、瑞(スイス)に留学した中国人学生の同窓会名簿である。寸法は二六・五×一九・〇センチ、紙は竹紙、四針眼訂法(四つ目綴じ)であるが、中央が広く、明朝綴とは異なった綴じ方である。筆者入手本は表紙及び扉を欠いている。同学録の部分以外にはページ番号を付していないが、表紙、扉のほかに最初の一葉を失っている可能

性がある。入手本は、第一章総則、第二章会員、第三章組織、第四章集会、第五章会費、第六章分会、第七章附則の全十六條から成る「中國留法比瑞同學會總會章」に始まり、次に第一次から第四次までの名譽主席団、名譽理事、理事長、常務理事、理事、主任秘書、總幹事、監事長、常務監事、監事など計二四四名の名簿が置かれている。画家では汪日章（第一次及び第二次監事長、常務監事、第三次及び第四次常務理事長、理事）、楊公達（第一次常務理事及び理事）、張道藩（第二次―四次名譽理事）、吳作人、黃顯之（ともに第三次監事）の名が見える。

その次のページからが同学録で、全二一六ページ、二一五八名を姓の画数順に従って配列し、一人ひとりについて別字（号）、性別、年齢、籍貫、学歴、職歴、現職、現住所、連絡先を記す。しかし、留学の時期と期間は省か

挿図10 「中國留法比瑞同學會總會同學録」

れているし、学歴を始め、他の項目についても記載を欠くことが少なくない。それらのうち、他の資料によって明らかにした内容を資料1の補遺に記した。なお、末ページに已故同学四十九名の姓名を列記する。

『留欧同学録』は編集者名及び印刷者名、発行年月を欠くが、呂霞光、吳作人の記載年齢と生年との関係から一九四二年又は四三年の発行と考えられる。さらに「中國留法比瑞同學會總會」の成立は、その「會章」の第四章集会の第一項に、本会会員の全体大会は毎年少なくとも一回開催する、と規定されていること、筆者入手本に第四次名譽主席団等の名簿が付されていることから、一九三九年又は一九四〇年と推定される。同会がいつまで存続したか明らかでないが、当時の社会状況から一九四六年、もしくは四七七年ごろに自然消滅したと考えられる。

『留欧同学録』所載の美術学生は九十五名（うち物故者二名）を数える。その中には吳作人や徐悲鴻、常書鴻、劉開渠、龐薰棻などのように、解放後の美術教育の発展に寄与することの大きかった人もいる。しかし、民国期に画

家として名声を得、また美術教育に相当な役割を果しながら、恐らくは当時の政治への関与の仕方のために、解放後は名前を抹消された画家、あるいは解放前後の動乱の中で消息を絶った画家も少なくない。『留欧同学録』は留欧美術学生に関する唯一の信頼し得る資料であり、且つ、中国国内においても原本を知る人は少ないから、同書記載の美術学生を資料1に挙げた。

また、「留欧同学会」発足時にはまだヨ―

ロッパ留学中であつた人、あるいは早くに帰国してすでに美術界で活躍しながら、何故か「留欧同学会」に参加しなかつた画家もいる。そのような「留欧同学録」に記載されていない留欧美術学生を人名録等から拾ひ、資料2に挙げた。その留学校、留学期間については、前稿『留日美術学生』で指摘したように粉飾の場合があるかも知れないが、ここでは資料の通りに記した。

二、海外藝術運動社、中華留法藝術協会、 中国留法藝術学会

留欧美術学生について述べるとき、忘れることが出来ないのは、彼らによる一連の芸術運動である。それを主に、許志浩著『中国美術社団漫録』⁽⁹⁾に拠つて簡単に記しておきたい。

海外藝術運動社

海外藝術運動社は初名を、太陽神を意味するギリシヤ語の Phoebus に因んで、福波斯社といい、また霍普斯会とも称した。同社は一九二四年、パリ大学でフランス文学及び西洋美術史を学んでいた林文錚とパリ国立高等美術学校に留学していた林風眠、呉大羽の三人が発起し、パリで組織したものである。その成立宣言に、「芸術は神聖で、尊厳なものである。芸術は独立し、自由であるべきで、宗教、政治の奴僕となつてはならない」と述べている。参加者は三人のほか李金髮、唐雋、劉既漂、邱代明、李樹化、李風白、王代之、曾一櫓などであつた。

海外藝術運動社は、一九二五年四月、別の中国人留学生団体「美術工学社」（未詳）と共同で、ストラスブルで留欧美術学生の作品を中心とした

「中国美術展覧会」を開催し、大きな反響を呼んだ。林風眠が蔡元培に認められたのは、この時である。また、やはり二五年、パリで開かれた「万国工芸博覧会」の中国館の活動を担当した。しかし、一九二五年暮、先ず林風眠が帰国し、ついで一九二七年には林文錚、呉大羽が帰国したため、活動は止まった。海外藝術運動社の精神は、帰国した林風眠、林文錚ら同社の成員の多くが教授となつた杭州国立芸術院で成立した芸術運動社に引継がれた。

中華留法藝術協会

中華留法（仏）芸術協会は、一九二九年四月十四日、パリ国立高等美術学校に留学していた方君璧と、ちょうどパリに滞在していた劉海粟、汪亞塵の三人が発起人となつて、「中国芸術を發揚し、ヨーロッパの芸術を中国に紹介し、留法（仏）同志の連絡を計る」ことを目的に、パリで成立した。主要な成員は三人のほか、李風白、范年、楊秀濤、張弦、司徒喬などであつた。一九三〇年初、先ず方君璧が帰国、続いて秋には汪亞塵が帰国、さらに翌三一年秋に劉海粟が帰国したため、活動は停止した。

中国留法藝術学会

中国留法（仏）芸術学会は、パリに留学中の中国人美術学生たちの発起によつて、学生同志の連絡と協力の強化、芸術活動の増進を目的として、一九三三年一月、パリで成立した。常書鴻が主持人となり、会の事務所をパリの Bardinet 十六号のアトリエに置いた。初期の会員は黃顯之、莊子曼、謝投八、劉曲樵、周圭、唐亮、陸傳紋、王子雲、周輕鼎、楊焱、呂斯百、胡善餘、秦宣夫、程曼叔、王臨乙、郭應麟、張澄江、李韻笙、常書鴻、虞炳烈、劉開渠、陳士文、曾竹韶、陳芝秀、馬霽玉、鄭可、張賢範、滑田友、唐一

禾、陳策云の三十人で、会務を次のように分担した。

総務股―常書鴻、呂斯百

文書股―周輕鼎、唐一禾

出版股―秦宣夫、劉開渠

展覽股―鄭可、王臨乙

會計股―曾竹韶、謝投八

中国留法芸術学会は、常書鴻、呂斯百の主導の下に、前後十六回の研究交流会、会員の画集の出版を行い、またフランスの各種展覧会へ出品し、例えば虞炳烈、鄭可、周圭、黃顯之、莊子曼、胡善餘、滑田友がパリ春季サロンに入選し、陳士文、王臨乙、呂斯百、陳芝秀、程曼叔、常書鴻がアンデパンダン展に入選するなど活発な活動を行い、多くの成果を挙げた。しかし、一九三四年春、会員の多くが帰国し活動は次第に停滞した。

『藝風月刊』第二卷八期¹⁰(一九三四年八月)は「中国留法芸術学会専刊号」に当てられていて、常書鴻が江鳥の名で「本会成立経過」と題した文章を載せている。当事者による、それも留法芸術学会の設立経緯についても、恐らく唯一の記録と考えられるので、次に全文を引いておく。

本会成立経過

江鳥(常書鴻)

確か一九三二年のクリスマス休暇中のことだったと覚えている。異国の風情は奇妙に人をわびしい気持ちにさせた。そこで(呂)斯百と(劉)開渠が新年にパーティーを開こうといひだした。

そのころ私たちは、四、五人でバルディネ十六号のアトリエで一緒に暮らしていた。というのはそこには画家や彫刻家のための仕事場が設けられていたし、ブルジョア生活様式から遠く離れた別世界で、いっさいの外国の礼教習俗の拘束がな

く、何の気兼ねもなく騒ぐことができたので、パーティーをアトリエで開くことにすぐ決めた。

この新年会に招かれた人は、もともと私たちが知っている友達から思いつくまに選んだものである。結局、十八人の名が挙げた。建築の虞炳烈、提琴(バイオリン)の虞夫人、彫刻の劉開渠、曾竹韶、王臨乙、程鴻寿、李韻笙女士、陳芝秀女士、油画の呂斯百、唐一禾、陳策云、馬霽玉女士、張賢範女士、常書鴻、陸傳紋女士、周圭などで、みな芸術を勉強している人であった。夜更けまで続いた、ほんとうに打ち解けた、楽しい団らんのもとで、より緊密で、より純粋な芸術団体を組織することが必要だと感じた。

ちょうどその時、留学仲間の郭応麟がフランスを發つて帰国するという話を聞いた。郭君は留學生の中でも成績の最も良いひとりであった。それに加えて穏やかで親しみ易い態度は、私たちに少からず好い印象をのこしていたので、彼が帰国のときは、皆でその気持を表わしたかった。また一方で、私たちは郭君がフランスを發つ前に、芸術会の基本プランを具体化したいと思った(というのは、彼は芸術会を主張したひとりであったからである)

そこで一月十四日に芸術同志を召集し、郭君の歓送会の席上、私たちの最近の計画を發表した。その時、劉開渠、秦善鑿(宣夫)、郭応麟、鄭可らが極めて熱心に議論して、みんな、私たちは共同して協力の実効を上げるべきで、実の伴わない名目はいらないということになった。ところで、当時、私たちの實際の協同関係はすでに十分な特色を持っていて、一般の人の注目を引くようなグループとしての名目を慌てて求める必要はなかった。

二月五日から三月五日までに三回の集會を持ち、私たちは芸術界の現状、芸術上の問題を自由に論評し、精神的に深い慰めを得たことを感じた。しかし、私たちの基礎を固め、対外的事業を發展させるために、何かひとつ組織が必要だと思

った。そこで三月五日の集会のときに、鄭可と常書鴻が、この会に名前をつけることを提案した。

そのときは四つの名称を考えた。1、中国留法芸術学会 2、中国留法芸術研究会 3、中国留法芸術同学会 4、Seine社、或いはSeine会、である。会の規約をつくることになってから、次の集會に提出して検討することにした。

ついに四月二日の大会で、本会の名称を「中国留法芸術学会」とすることに決定、同日、本会簡章を承認し、第一次委員を選出して、本会は正式に成立した。

去年四月二日から今年四月二日までの一年間に、実行しようと希望しながら実現できなかったことがあるのを大変恥ずかしく思っている。

もともと一九三三年十月にパリで会員の出品による展覧会を開催する計画であったが、会員の出品が十分でなく、質量両面において世界芸壇の中心であるパリで展覧会を開催する必要はないようであったので、開催しなかった。(しかし、仲間のうち大半はすでに前後して各サロンに出品して、相当な成績を得ていた)

その次は、本会アトリエの構想である。当初、仲間の多くは、みんなが資金を出し合って本会会員共有のアトリエをつくることが出来ると期待していた。みんなが共同でモデルを雇うほか、仕事はみんなが輪番で担当することにした。しかし、経済的な制約から、異郷での留学生仲間の生活は苦しく、とても実現できなかった。

第三は、本会会員の作品の出版である。最初は会員全員の作品を一緒に入れる計画であった。しかし、会員個人の経済事情のために、ただ第一集十一葉を出版しただけである。しかも四人の会員の作品だけであった。私たちは今年第二集を出版し、会員の代表作を沢山入れたいと希望している。

第四は『藝風』を借りて、本会の特集号を出版することであった。初めに予定していた執筆者は、このたび刊行の執筆者より多かった。しかし、時間的問題の

ために、あるいは会員が帰国の準備に追われていて、予定通りに書上げることが出来なかったために、私たちが望んでいたようには行かなかった。『藝風』編集者及び読者のご諒承を頂きたい。

要するに、この一年、少なからず残念なことがあったことを私たちは認め、この新年の年頭に当って、私たちの希望が実現できることを期待する。この一年来、十六回の集會を持ち、お互いの研究に対する真剣な態度が次第に相互に分つてきて、仲間一同の将来の仕事には十分に樂觀している。さらに、帰国した仲間が、外国で示した熱誠と勇気を忘れることなく、私たちの未完の仕事を続けて努力することを希望している。

その「専刊号」に、リヨン国立美術学校に留学、帰国して国立杭州芸術専科学校教授になっていた孫福熙が、留法芸術学会が生れた必要性和当時の中国美術界の状況を述べた次のような文章を載せている。本稿の主旨から少しく外れるが、全文を引いておきたい。

現在の中国芸術 いかにして根を生じ土に着くことが出来るか

フランスで芸術を学ぶ(中国人)留学生は、これまでひとつも組織を持つことがなかった。共同研究あるいは集會の機会がなかっただけでなく、姓名、人数を知る術すらなかった。たまたま何人が出會って、相手がやはり芸術を学んでいることを知ると、互いに軽蔑するか、「同行嫉妬」(同業者はねたみ合うもの)さえするのであった。

中国留法(仏)芸術学会の組織は本当に必要であり、また中国で、「中国留法芸術学会専号(特集号)」を刊行することはいっそう必要なことである。

我国の留学生は、公費派遣であろうと自費留学であろうと、皆大きな悪弊を持

っている。これは多くの人がよく知っているところである。しかし、国内で高い水準の学術を得ようとしてもまったく不可能である。とくに芸術の各分野は、未だ優れた師もなく、また十分な設備も少ない。従って、中国人が他の国へ留学することは、やむを得ないことである。それを補うために、第一に外国に居る留学生相互の連絡、第二に国内の「同業者」との相互の連絡が必要である。

外国に居る留学生同志の連絡は、共同研究を可能にし、その上に分担、協力によって同じことをしたり、何かをやり忘れるという失敗を免がれることが出来る。

国内の同業者同志との連絡は、いっそう重要である。中国の留学生は国内で何が求められているかを知らず、国内の状況に無関心である。それは「戸外でテーブルや椅子を造る」もので、「門を閉ざしてそれぞれ勝手な車を造る」ことよりも、さらにおかしいことである。ある日「学成りて国に帰る」と、まるで空から降りてきた怪人で、人は彼を知らず、彼もまた人を知らず、全身これ外国から持ち帰った服装で、立ち居ふるまい、話し方も外国仕込み、いわゆる学術、思想に話が及ぶと、当然外国かぶれしていて、国内の人のよく理解するところではなく、お互いに分りあえない。

このような境地に身を置いて、はじめて帰国した留学生にはただ二筋の道があるだけである。第一の道は恐れつつしみ、自分の祖先が伝えてきた社会を見ても、いささかも懐かしさを感じず、ただ神秘的で理解できず、恐れを覚えるだけである。第二の道は驕りで、理解できないために恐懼から変わったものである。ちょうど一匹の犬が知らない人を見るとからだを大きくし、やたらに吠えるようなものである。例えば、名刺に「パリ大学芸術科博士」と印刷し、新聞社に自分でニュースを送って、万国博覧会で金牌を得たことがあることをひけらかし、あるいは話の中で時どき「ぼくがパリに居たときはね、パリ国立美術学校長は親しい友だちでね」などとさりという。機会があれば、いつでも大きなことをいい、パリ

大学に芸術科があるかないか、芸術を学ぶ人に博士号があるかないかは問題にしない。その実、最もあわれなのは、およそ傲慢な人はすべて恐懼のためで、その恐れの原因は相手の情況が分らないためである。

留学生と国内の同業者が連絡をもてば、恐れもなくなるし、また驕りもなくなる。

留学生が帰国したばかりのときは、恐れと驕りの悪弊があるが、しかし熱心で、意欲満々である。しばらく経つと、恐れと驕りが消えて、すっかり意気消沈し疲れきってしまう。どの科目の学生もすべてそうであるが、とくに芸術を学ぶ学生にそれが甚しい。しかし、芸術を学ぶ人はいちばん意気消沈したり疲れたりしてはいけない。なぜなら芸術は感情を棟柱とするものであり、刻々と新しいものを表現することが求められ、見る人に疲れさせず、感動させなければならぬからである。

はじめから恐れと驕りがなければ、留学生は帰国後、意気消沈し疲れれることにはなりにくい。新たに帰国した学生の連絡は、持ち帰った熱意と元気さにより、意気消沈し疲れきった者に以前の勇気を回復させる。これが特にまさに帰国しようとしている芸術家を歓迎する意味である。

現在の中国芸術について論じると、多くの待つことができな条件がある。以下にそれを列記して、大方の人々の討論に供して、公認されるのを待つて、我々の目標として、その実現に全力をつくしたい。

第一に、全国芸術学会を組織し、各芸術学校・各省各地の芸術団体ともに発展させ、彼我の境界と仇視の弊害をなくす。これにより全国芸術学会は以下の多くの必要な事業を生み出すことが出来る。

第二に、首都に一つの芸術館を設立し、世界の各時代、各地域の芸術品を探し集める。豊富にして精美なることは難しいので、まず代表作数件を求める。中国

の絵画、彫刻、民間のあらゆる芸術品は、必ず時代に照らして努めて精美かつ詳細であることを求める。各地方も力量に応じて小芸術館を設立する。

第三には、芸術叢書を編集する。中国芸術史綱・各時代の芸術思想・各芸術家の伝記・各種芸術の方法を含み、特にまだ取り上げられていない民間芸術に留意する。一方で外国の芸術史、芸術理論、芸術家の伝記を紹介する。あわせて各段階の学校の芸術教授書を編集する。

第四に、巡回の芸術教師をつくって、現在の各段階の学校の不適当な芸術教育の指導を助ける。芸術科目の教科書は必要ではないが、ただ教師には正確で詳細な教授書が必要である。教授書の文章は完全には理解しにくいので、巡回教師の各地への視察が必要である。この視察により、各地の特殊な好材料を見つけることが出来る。

第五に、展覧会を組織し、全国的、地方的に随時開催する。展覧会は日常の制作を励まし、研究を高める最良の方法である。展覧会は芸術家自身を励ますだけでなく、最大の目的は一般の人々を教育することにある。一般の人の芸術趣味を高めようとするなら、多くの展覧会によって少しづつ導いてゆく。芸術は大衆のものとなるが、決して大衆に媚びたものではない。媚びるような芸術家は、農民から租米を取奪する地主資本家とどんな違いがあるだろうか。本当の大衆芸術家は、大衆に彼の作品を愛好せしめ、理解させ、しかもその作品は創造的であって、決して大衆に迎合したものではない。

第六に、社会に芸術家と芸術的職人とを区別する観念を育成することである。思うに芸術学校は人材を育成するに、芸術家・芸術教師・芸術工人の三種の目標に分けられる。西洋の芸術学校では芸術家の人格と芸術の教育法などの課程があるのを見ない。ただ理論と技術を教授するだけで、他には何も無い。これは完全に芸術工人の育成を目標としている。なぜなら一つの学校で三種の非常に異った人

材を育成しようとすることは不可能だからである。そこで芸術教師は師範学校で養成する。あるいは師範教育を受けなくてもまた教師になることが出来る。芸術家に至っては、その自由な生長にまかせ、芸術学校の学生からでもあるいは学校教育を受けてなくても生まれてくる。芸術家に対しては専門の育成教育はない。これが一つの大きな欠点である。中国では、すべての芸術学校が芸術家の育成を目標としているようである。この目標は決して間違っていない。ふだん常々芸術家がいかに高貴ですぐれぬきんでいるかを学生に教え、人々は皆こうした考えをもっている。けれども世の中は、毎年多くの卒業した芸術家を持つこととはできないから、教師となったり職人となったりするのは免れがたい。しかし、高貴と超逸の教えを受けたあとで、どうしてうまく片手を芸術と結び、片手で金銭に関わることが出来るようか。またこれも一つの「しかし」である。芸術家の腹は決して芸術ではなく、腹が鳴れば食わなければならない。そこで個展を開き、著名人に頼んで題画、序文、紹介文を書いてもらう。そして、こうした画を人に贈り奉る。いわゆる奉贈は、つまり大道床屋のいう「ご遠慮なく、ご遠慮なく」と同じで、金を手に入れるための奉贈である。中国の芸術学校もこうした弊害をよく承知している。まだ敢えて専門に芸術家を育成する目標を確定しない理由である。ある時は師匠と職人技術の育成にも顧慮し、そのため教育はどちらつかずとなつて効力を失ってしまう。われわれは芸術家は高貴な存在であることを認識し、同時に職人の、仕事を金銭に換える態度を必要とすることも認めなければならない。思想と技術は同じではなく、金銭の出入りはまさに思想と技術が融通できないのと同様である。われわれはこの習慣を保持し、同時に社会にこの習慣を知らしめねばならない。芸術家は決して、口では金銭を必要としないが、手でしっかりとお金をつかむものの代名詞ではない。

第七に、須く民間の材料を広く研究し、大いに採用し応用すべきである。現在

の中国芸術は極めて大きな難関に到っている。つまり服装・食物・住居などの名詞と同様に、すべて中国のものと西洋のものとの区別がある。絵画にも中国画と西洋画の名称がある。中国画の中にかつて無かったものは中国の絵画とはならず、西洋画の中になかったものは西洋の絵画とはならない。そこで、中国画は中西の昔の人の複製のようになってしまった。この大きな病いを治すには広い表現の民間の事物を取り上げて、実用芸術の道をうち開くことである。これは中国・西洋の昔の人が未だ描かなかつたものであり、材料の違いにより、次第に中国・西洋の昔の人とは異なつた芸術に到達し、中国芸術をして地に根付け、創造の目的に到達させる。

我々は留法（仏）芸術学会が特集号を刊行する機会を利用して、七ヶ条の意見を提出し、大方の討論を願ひ、国内の、そしてこれから帰国しようとする各會員の共同研究により、着実に進行することを希望する。

ところで、留日美術学生による美術団体は芸術社と中華独立美術研究所の二つであつた。

芸術社は、欧米現代絵画芸術の学習と創作経験の相互交流を目標として、一九一九年陳抱一、許敦谷、胡根天、関良の四人が東京で組織したが、一、二年後に四人とも帰国したため解消した。

中華独立美術研究所は、一九三四年、曾鳴、梁錫鴻の発起によつて東京で成立した。主な會員は李仲生、李東平、方人定、蘇臥農、趙獸らで、發起人以下は、全員が広東出身という、地縁的性格の濃い組織であつた。三四年九月に「中華旅日作家十人展」を東京で開催したが、三五年に主要所員が帰国し、活動を停止した。しかし、発足の主旨は、帰国所員が一九三五年広州で組織した中華独立美術会に承継された。

留日美術学生による美術運動は、留欧美術学生のそれに比べると、規模も小さく、また低調であつたし、帰国後の活動も中華独立美術会を除くと、あまり目立たない。一方、留欧美術学生は帰国してからも、例えば呉法鼎が一九二一年に阿博洛（Apollo）学会を、孫福熙は一九三三年に芸風社を組織しているし、海外芸術運動社は林風眠、林文錚によつて芸術運動社に生れ変わるというように、運動を継承した例が多い。

美術教育に於いても、東京美術学校卒業生を中心とする留日美術学生は、中華民国初期の一九一〇年代から二〇年代にかけて、主要な美術学校教員になつて美術教育の推進に貢献した。しかし、一九二〇年代後半から三〇年代半ばにかけて、留欧美術学生が次々に帰国し、彼らが国立杭州芸術専科学校、国立中央大学、国立（北京）芸術専門学校など主要な美術教育機関の教員に就くことが多くなると、留日美術学生の教育界での地位は相対的に低くなつた。一九三〇年代に始まり、解放後にも続いている留日美術学生と留欧美術学生の確執の一因は、そこにもあるのかも知れない。

（九七・十一・一〇）

補記

海外留学生の生活費は、個人によつてももちろん大きく異なるし、留学地によつてもかなりちがいがあつた筈である。それでは政府派遣留學生への給費額はいくらぐらいであつたのだろうか。それについては直接の資料を持ち合わさないが、『江蘇教育』第一巻第五期（中華民國二十一年—一九三二年—六月発行）所載「江蘇省留學歐美（米）日本各國津貼（給費）生一覽表 民國二十一年一月起至一二月止」に記されている数字が、一応の参考となる。その「一覽表」の中から、美術留學生を紹介しておきたい。記載は姓名、出身地、

留学校（専攻）、給費期間、給費額の順である。

民国二十一年の百元の価値はどのくらいだったのだろうか。適当な例ではないが、民国二十二年の『中国実業誌江蘇省』によると、江蘇省の質屋の支配人の月給が約一〇元、上海市政府社会局の統計によると、民国十八年四月から十九年三月まで一年間の上海市労働者三百戸の平均支出額は四百五十四元であった。一方、魯迅の教育部僉事としての民国一五年八月分俸給は四百元であった。

李希元 鎮江 巴黎国立美術学校（絵画） 給費一―一二月 民国一七年一〇月中央大学区核准給費 毎月六百佛郎（フラン）

呂斯百 江陰 里昂国立美術専門学校（油絵） 給費一―一二月 民国二〇年一月本庁（註・江蘇省教育庁）核准補給里昂中法大学津貼全年国幣四百元 每季国幣一百元

王臨乙 上海 里昂国立美術専門学校（彫刻） 給費一―一二月 民国二〇年一月本庁（註・江蘇省教育庁）核准補給里昂中法大学津貼全年国幣四百元 每季国幣一百元

華麗衡（女） 無錫 東京美術専門学校（洋画） 給費一―六月 民国一八年一月中央大学区核准津貼 毎月日金五〇元

金学成 奉賢 東京美術学校（塑造） 給費一―一二月 民国一九年六月本庁（註・江蘇省教育庁）核准津貼 毎月日金五〇元

註

(1) 嶺南美術出版社 一九八五年五月刊

(2) 広西美術出版社 一九九六年一二月刊

(3) 『良友』第四六期所載、中華民國一九年四月発行、『徐悲鴻藝術文集』上冊所収、

台北・藝術家出版社、一九八七年一二月刊

(4) 台北、藝術家出版社 一九九一年六月刊

(5) 『我与悲鴻—蔣碧微回憶錄』長沙、岳麓書社 一九八六年八月刊

(6) 北京大学画法研究会（北京大学画法研究所ともいう）は「画法を研究し、美育を發展させる」ことを目的に、北京大学総長蔡元培が發起し組織したもので、現代中国最初の新しいタイプの絵画研究団体である。一九一八年二月二十二日成立。蔡元培を会長とし、導師に陳師曾、貝季眉、馮漢叔、徐悲鴻、錢稻孫、賀良樸、湯定之、吳法鼎、李毅士、鄭錦、胡佩衝らを招いた。北京大学の協力を得て、図画陳列会、画法研究会成績展覽会を開催し、『絵学雑誌』（第四期で停刊）を発行したが、一九二三年、蔡元培が政府の北大生逮捕に抗議して総長を辞め、ヨーロッパに行つたため、活動は停止した。

(7) 『世界藝術之没落與中国藝術之復興』一九四七年九月四日重慶『世界日報』原載、

『徐悲鴻藝術文集』下冊所収

(8) 昆明中華書局 一九三九年三月刊

(9) 上海書画出版社 一九九四年一月刊

(10) 杭州藝風雜誌社編輯出版、上海嚶嚶書屋發行

資料1 『中國留法比瑞同學會總會同學錄』所載、留歐美術學生名單

原本にパリ国立美術学校、パリ国立美術学院とあるのはEcole des Beaux-Arts、また、パリ国立高等美術専科学校、パリ高等美術専科学校、パリ国立美術専科学校、パリ高等美術学校などと記されている学校はEcole Supérieure des Beaux-Arts、比国皇家美術院、比国北京皇家美術院はL'Académie Royale des Beaux-Arts de Bruxellesと考えられるが、原本のままにした。なお、補遺番号は筆者によるものである。

姓名	別字	性別	年齢	籍貫	學歷	曾任職務	現任職務	現在住址	永久住址	補遺番号
尹陂九		男	四一	四川	巴黎美術學校及圖案工藝學校畢業	四川美專校教員、北平藝術學校教授、成都中華工藝社經理	從事工藝製造及一切裝飾設計	四川仁壽清水鎮	同上	
方幹民		男	三八	浙江	巴黎及里昂美術專校畢業	杭州藝專教授兼教務主任	中央黨史編纂委員會專員	山洞輯園	浙江溫嶺縣	1
王子震		男	三九	江蘇	巴黎美術專門學校畢業		昆明藝術專門學校教授	重慶中一路二八六號一心花園	昆明藝術專門學校	
王衡芷	鈞石	女	三六	江蘇	巴黎工業圖案專門學校及美術學院畢業	軍委會戰時工作訓練團政治教官	十八中學藝術教員	四川三台縣前小灣街十六號		

余方體	呂霞光	呂斯伯	朱沅芷	王邁士	王臨乙	王嘉仁
男	男	男	男	男	男	男
四六	三六	三八			三五	三五
四川長壽	安徽鳳陽	江蘇	廣東開平	福建	上海	山東 夏津縣
及郎西大學政治經濟畢業	法國紡織美術學校	巴黎美術學院畢業、 比國皇家美術院畢業	里昂大學及巴黎高等美術畢業	法美研究美術	法國專門工程學校畢業	比國皇家美術院及 巴黎美術學校畢業
會任軍需交涉員、秘書、顧問等職	蘇州美術學校及國立藝術學校教授、軍委會美術科長	蘇州美術學校教授、戲劇學校教授				北平藝術學院美術專門學校教授
	軍事委員會政治部設計委員	中央大學教授			教育部美術教育委員會專員、國立藝專教授	
	重慶曾家岩明誠中學	重慶中四路一四三號			磁器口鳳凰山頂美術教育委員會	
四川長壽 萬順鎮						江北觀音橋新村一七八號
	5	4	3		2	

周輕鼎	周思明	周圭	何乃民	何之培	岳崙	汪日章
	去非	方白		心聖	剛克	荻浪
男	男	男	男	男	男	男
	三一	三八	四十	三四	三六	三七
湘南安仁	湖南	江蘇	浙江	湖南邵陽	湖南邵陽	浙江
巴黎美術學校畢業	法國國立藝術院肄業	京王家美術院畢業	里昂中央工藝院畢業	巴黎國立美術院肄業	法國里昂美術專門學校畢業	巴黎大學市政學院及國立美術學校畢業
	教授教官秘書等職	蘇州美專、武昌藝專及中央大學教授		武昌美專教授、軍官大隊政治教官、新運總會美術專員		南京市政府技正、上海新華藝術專門學校教授
	湖南省政府秘書	立法院專員	中農行專員	湖南軍區徵募處第三科科長		行政院秘書 軍委會侍從室秘書
	塘又一村十五號	重慶立方院	中華路四號	湘耒陽軍管區司令部		重慶行政院
藥店轉 安仁德康	蓮莊 郵轉源山	祁陽洪橋		湘耒陽三民鄉釀溪 巴家塘烟 竹村	湖南邵陽 協平里八號	浙江奉化 蕭王廟鎮
8		7				6

李瑞年	李金髮	李有行	吳作人	吳恆勤	郎魯遜
				以勞	迦郎
男	男	男	男	男	男
三三	四二	三七	三五	三九	三八
河北天津	廣東梅縣	四川江油	安徽	安徽休寧	浙江杭縣
巴黎高等美術專科學校畢業、比國皇家美術院	巴黎國立藝術院畢業及抵中大學文科肄業	法國里昂國立美術學校畢業	比國比京皇家美術院	巴黎國立高等美術專科學校畢業	巴黎國立藝術院畢業
國立藝術專科學校教授	國立藝專教授、國民政府大學院秘書、外交部秘書	巴黎維奈絲織廠圖案設計師、北平藝術專門學校校長		上海新華藝術專科學校西畫系主任、軍委會政訓處藝術股長	復旦大學教授、中央宣傳部國際宣傳處專員、軍委會顧問事務處編譯
教育部美術教育委員會專任委員	外交部專員、第四戰區長官部專員	六合工藝社社員	中央大學教授	大陸銀行	軍委會軍電處科長
渝磁器口鳳凰山頂美術教育委員會	柳州第四戰區長官部外事處	四川成都中東大街三十六號	重慶沙坪壩中央大學	重慶大陸銀行	重慶南岸黃桷埡第六號信箱
	廣東梅縣萬可成號			安徽屯溪萬安溪頭安裕堂	
14	13	12	11	10	9

尚其煦	李驥	李風白	李汝驊	李慰慈	李不遑	李寶泉
騷夫	超士				印農	
男	男	男	男	男	男	男
四十	四十				五四	三三
長沙	廣東	湖南芷江	河南黃縣	廣東	湖南長沙	江蘇南京
業、里昂美術學院 肄業二年	業 法國巴黎藝術院畢	業 巴黎大學文科兼學 美術	業 巴黎美專	業 法國巴黎美術專門 學校畢業	業 日本明治大學、法 國巴黎工藝學院畢	業 法國里昂美專學校
建設委員	駐法總支部執行委員、北平大 學藝術學院教授、湖南省政府	歷任北平藝專、杭州藝專教授			上海同濟法政大學教授、革命 軍三十六軍上校秘書、湖南省 政府參議	上海美專教授、成都華西大學 教授
	授 國立藝專教			授 中法大學教		北平研究院 編輯
湖南耒陽 南門外九 眼塘五號	專 溪國立藝	沙坪壩磐		學 昆明黃土 坡中法大	號 湖南零陵 水晶巷六 號華商字	重慶中國 文藝社
櫃轉交	場靜園	杭州松木	鎮大昌號		七號 湖南省城 保安里十	
	18	17	16		15	

唐一禾	唐雋	徐悲鴻	袁姝貞	柳樹楨	范新瓊	胡善餘	邵德輝
	哲安						
男	男	男	女	男	女	男	男
三七	四六				四三	三四	
湖北武昌	四川達縣	江蘇	浙江杭州	長沙	湖南	廣東開平	江西南昌
畢業 巴黎美術專門學校	學校 巴黎實用藝術專門	巴黎國立高等美術	巴黎美術學校畢業	法國研究美術	學校畢業 法國里昂美術專科	專科畢業 巴黎國立高等美術	學校畢業 法國國立陶瓷專門
	上海美專、新華藝專教授、美術生活雜誌主編、達縣中校長	中央大學教授			教授 上海美術專科學校及暨南大學	廣州市立美專教授	
武昌藝術專 科學校教授	育主任 精英中學訓	授 中央大學教			系主任 桂林美術專 科學校西畫	術科 國立重師美	
校 昌藝專學	重慶來龍 巷四號	轉 中央大學			桂林府後 街十三號	重師 北碚國立	
	同上						
21	鎮 達縣營村						
		20				19	

陸傳紋	秦宣夫	孫世瀨	孫福熙	馬霽玉	馬壽徵	唐蘊玉
				及羽		
女	男	男	男	女	男	男
三八	三八		四六	二六	四五	
江蘇	廣西		浙江紹興	遼寧遼陽	四川江北	江蘇吳江
京王家美術院	巴黎美術學校畢業	留法研究美術	留法研究美術	巴黎美術學校畢業	比國國立藝術專門學校畢業、比國農學院畢業	巴黎美術學校畢業
部主任	武昌藝專教授、蘇州美專女子	北平藝術、清華藝術暨國立藝專等校教授		山西民族革命大學指導、青年書店編輯	上海勞大、浙大教授、四川教育學院教授	
	專任委員	教育部美術教育委員會		編輯	四川省立教育學院教授兼農場主任	
主轉	立法院周	磁器口鳳凰山頂美術教委會	湖南耒陽參政會向秘書長轉	重慶南岸黃葛村復興村七一號	巴縣磁器口教育學院	
				重慶新生路四〇號五十年代出版社轉	江北新城馬公館	九龍彌敦道二四六號
25	24		23			22

高樂宜	陳幼蘭	陳慕霞	陳士文	陳驥程	陳才貴	符拔雄
				駿聲	宇昶	育華
男	女	男	男	男	男	男
三九				四二	三三	三九
福建	安徽廬江	湖南	浙江	山東德縣	四川江北	廣東文昌
法國巴黎國立美術專門學校	法國羅佛宮學院畢業	比國比京美術院畢業	巴黎美術專門學校畢業	法國魯貝高等美術紡織專門學校畢業	巴黎美術學校	法國里昂美術學院畢業
上海美專校、北大藝術院等校教授				山東省政府工商廳技士、軍政部北平製呢廠主任技士		廣州大學教授、中國國民黨駐法總支部里昂第一支部常務委員
						廣西綏靖公署參議
四川成都廳署街三十四號				重慶巴縣龍隱鎮第一號信箱	四川江北高脚土地街五十三號	廣西綏靖公署
				山東德縣封家街封彝山轉	四川江北正街寶華七十五號轉	廣東文昌縣昌洒市保生堂轉
27			26			

黃顯之	黃里州	常玉	常書鴻	莊子曼	滑田友	高志清
						澄宇
男	男	男	男	男	男	男
三五	四十		三九	三六		
湖南長沙	四川樂山	四川南充	浙江	廣東番禺	江蘇淮陰	遼寧
巴黎高等美術專科學校畢業	法國魯貝高等美術紡織學校畢業	巴黎美術學校畢業	法國里昂藝術專門學校畢業、里昂紡織專門學校畢業	巴黎高等美術學校畢業	巴黎美術專門學校畢業	比國皇家美術院畢業
	四川省立高級工科中學工廠主任、四川大學教授、軍政部北平製呢廠技正		北平藝專、及國立藝專等校教授	武昌藝專教授、中央軍校第七分校政治教官		
授	四川中壩營業稅局		教育部美術教育委員會委員兼秘書	教育部社會司服務		
系	中大藝術號	成都蜀華街四十六號	鳳山頂美術教育委員會	青木關教育電教會轉		
	四川樂山河呷坎				中國留法比瑞同學會總會	
32		31	30	29	28	

張宗英	張紫瓊	張宗禹	張德榮	張道藩	黃宗默
		筱泉	西平		
女	男	男	男	男	女
		三四	三九	四六一	三五
江蘇	江蘇吳縣	浙江紹興	上海	貴州	江西
巴黎美術學院畢業	畢業 巴黎美術專門學校	畢業 巴黎高等美術學校	飾研究院畢業 學校畢業、法國偽	英國倫敦大學美術 科畢業、巴黎最高 藝術專校研究	學校 巴黎國立藝術專門
		蘇州美專教授、蘇州女職美術 科主任、中央電影攝影場美工 部主任、置景組組長	設計顧問公司於上海 中國漆偽飾公司於瑞士、自設	巴黎札嗎裝飾公司設計專師、 自設美術工藝廠於巴黎、自設	曾任上海、蘇州藝專教授
		軍委會辦公 廳顧問處科 員	建國食品社	教育部次 長、中央宣 傳部部長	
昆明北平 研究院嚴 濟慈轉		重慶國府 路樂廬	樂山嘉州 公國內建 國食品社	重慶川東 師範內教 育部	宜賓交通 街一五號
	江蘇吳縣		上海成都 路廣仁里 八號柳溥 慶轉		南昌裘家 場五十七 號
	34			33	

楊公達	楊化光	曾竹韶	程曼叔	許士騏	張充仁	張楚葳
男	女	男	男	男	男	男
三八	三六		三二一	四一		三五
四川長壽	北平		江蘇吳縣	安徽	江蘇	湖北武昌
巴黎藝術學校	巴黎國立美術專科學校畢業	巴黎美術專門學校畢業	里昂美專、巴黎美專、巴黎裝飾美專		比國比京皇家美術院畢業	巴黎大學藝術及考古學院畢業、巴黎大學文科研究院研究員
簡任祕書	南京立法委員會委員、教育部	北平美術專門學校教授	湖南地方行政幹部學校教授	國立美術陳列館顧問、中國美術會理事、教育部全國美展會專門委員、衛生署技正		
主任委員	重慶市黨部		陸軍大學教官	成都華西大學教授		
部	重慶市黨部	院	重慶山洞陸大轉			北碚黃桷樹鎮東陽路七十四號
四川長壽			江蘇蘇州胥門內瓣蓮巷五十號			漢口存仁巷正街鼎升恆油坊
	38	37	36	35		

劉立廷	劉家裕	劉開渠	蔣仁	潘玉良	廖新學	董思敏	楊仲子
	晴溪					道嚴	
男	女	男	男	女	男	女	男
	三五	三九					五五
廣東大浦	安徽	江蘇庸縣	江蘇宜興	南京	雲南富民	河南	南京
巴黎工藝學校	研究四年 巴黎高等美術學校	畢業 巴黎美術專門學校	巴黎美術學校	巴黎美術學校	巴黎美術學校畢業	比國教會學校、魯文美術學校畢業	法國都魯斯大學工程師及諾沙倫專門藝術院畢業
	安徽省立女中圖畫教員	杭州藝專教授、教育部國外著作員、中央文化事業計劃委員會專門委員					大學教授廿年、北平大學藝術學院院長
	成都南虹藝術學校教授	國立藝專教授					國立音樂院院長
	成都東門街一〇二號	沙坪壩中央大學工務組程達騰轉					青木關國立音樂院
廣東大浦大府區	安徽懷遠龍亮			南京東廠街四號			
		44	43	42	41	40	39

談錦瀾	譚旦岡	魏素太	韓樹功	戴秉鑫	戴秉心	盧章耀	劉深山	劉家玉
					潔塵			
男	男	女	男	男	男	男	男	男
					三八			
湖北漢陽	江西	湖北武昌	遼寧	江西	浙江金華	浙江	四川巴縣	安徽蕪湖
巴黎美術學校畢業		比國北京皇家美術院畢業	法國里昂美術學校畢業	比國高等美術學院畢業	比國皇家藝術研究院畢業	留比研究美術	法國巴黎美術學院畢業	巴黎美術學校
					蘇州美專教授、軍委會戰幹團第一團政治教官	中央大學教授		
	四川省立高級工藝學校事務處主任		黨政委員會		重慶師範教員			
	成都復興門外新村		重慶重慶村十七號		北碚重慶師範學校			
					浙江金華西方街三十五號			蕪湖大馬路九十二號
46					45			

王子雲				江蘇	畢業					48
龐薰琴		男			巴黎美術學院畢業					47
嚴德輝		男		浙江杭縣	巴黎美術學校畢業					

已故同學

蔡威廉 49

江小鶴 50

註

維奈絲 ビーナス

諾沙倫 ノジャン・ル・ロア

都魯斯 ツールーズ

巴黎 パリ

北京 ベルギー首都ブリュッセル

郎西 ランス

里昂 リヨン

羅佛宮 ルーブル宮

魯佛爾 ルーブル

魯貝 ルベール

魯文 ルーベン

倫敦 ロンドン

補遺

ここには『中國留法比瑞同學會總會同學錄』（簡稱『留歐同學錄』）に記載のない生卒年、留學時期または期間、『留歐同學錄』の空欄の項目のうち、他の資料によつて判明したものを記した。

なお、欧米人名は漢字表記からカタカナに移した。漢字表記は異なるが、同一人かと考えられる場合も、漢音をそのままカタカナにしておいた。

1 方幹民 浙江省温嶺 一九〇六一一九八四 一九二六一一九二九（三〇）年

国立パリ高等美術学院ビアン・アンローランス教室に留學、上海新華藝專、国立西湖藝術院、上海美術教授を歴任

2 王臨乙 一九〇八一一九九七 一九二八一一九三五年リヨン中法大学彫塑系、パリ高等美術学院彫塑系に留學、国立北平藝術專科學校彫塑系教授

3 朱沅芷 一九〇六一一九四五 一九二一年米カリフォルニア州に移住、カリフォルニア美術学院入学、一九二七年からパリで活動、一九三〇年ニューヨークに移る

4 呂斯伯(百) 江蘇省江陰 一九〇四一九七三 一九二八年末一九三四年七月、フランスに留學、リヨン高等美術專科學校卒業、パリ国立高等美術專科學校 DEVAMBEZ 画室、アカデミー・ジュリアンに学ぶ、国立中央大学藝術

系教授

5 呂霞光 一九〇六一一九九四 一九二九年渡仏、パリ国立高等美術学校 Louis Roger 素描班入学、一九三一年ベルギー皇家美術学院入学、一九三四年同学院卒業、パリ国立高等美術学校油画班入学、一九三六年ごろ帰国

6 汪日章 又字勉朗 浙江省奉化 一九〇五年生 一九二六一一九二九年、パリ国立高等美術学校アイ・ローラン油画教室留学、上海新華藝專西画系主任、昌明藝專教授を歴任

7 周圭 別署石竹居主人 江蘇省南匯 一九〇六年生 一九三〇—一九三三年パリ国立高等美術学院で Louis Roger 及び J.P.Laurens に素描・油画を学ぶ、一九三三—一九三五年ベルギー・ブリュッセル皇家美術学院留学、Alfred Bastien、E.Rimbaux 及び A.Matton に学ぶ、一九三五年帰国、蘇州美專、国立中央大学、武昌藝專教授を歴任

8 周輕鼎 湖南省安仁 一八九六一一九八四 一九三一—一九四五年フランス留学、パリ国立高等美術学校彫塑系卒業、リヨン、ヨハン・シーマン工作室留学、国立杭州藝專教授

9 郎魯遜 新華藝專科学学校彫塑系教授

10 吳恆勤 一九二五年渡仏、一九三〇年冬帰国

11 吳作人 安徽省涇県 一九〇八一—一九九七 一九三〇年五月—一九三五年秋、パリ自由画院、ルーブル宮学校、パリ美術学校シーモン教室、ベルギー、ブリュッセル皇家美術学院 Alfred Bastien 教室に学ぶ、国立中央大学藝術系、国立北平藝專、中央美术学院教授を歴任

12 李有行 一九〇五—一九八二 一九二九年リヨン美術科学学校染色図案科卒業、一九三一年帰国、国立北平藝專教授

13 李金髮 一九〇〇—一九七四 一九一九—一九二五年フランス留学、パリ国

立高等美術学校彫塑系卒業、武昌中山大学、国立西湖藝術院教授

14 李瑞年 一九一〇—一九八五 一九三三—一九三七年、ベルギー皇家美術学院、パリ国立高等美術学校に留学、昆明国立藝術科学学校、国立中央大学教授を歴任

15 李不達(魁) 一八八六一一九六七 一九一三年日本留学、一九一九年渡仏、勤工儉学、一九二七年帰国

16 李汝驊 劍晨 一九〇〇年生 一九三七年ロンドン大学留学、藝術研究、一九三八年フランスに移り、絵画、彫塑を研究、一九三九年帰国、重慶国立藝專、国立中央大学教授を歴任

17 李風白 一九〇三—一九八四 一九二〇年渡仏、勤工儉学、一九二八(一説二九)年パリ国立高等美術学院卒業、一九二九—一九三三年杭州国立藝專油画系主任、一九三三年夏再び渡仏、一九五三年一〇月帰国

18 李驥 浙江省杭州 一八九三—一九七一 一九二一—一九一九年フランス留学、パリ国立美術学校卒業、上海美專、国立北平藝專、国立杭州藝專教授を歴任

19 胡善餘 一九〇九—一九九三 一九三二年渡仏、一九三五年パリ国立高等美術学校卒業 一九三六年帰国、広州市市立美術学校教授

20 徐悲鴻 江蘇省宜興 一八九五—一九五三 一九一九年三月渡仏、一九二〇年パリ国立美術学校入学、かたわらダニヤン・ヴーブレ、アカデミー・ジュリアンに学ぶ、一九二一年にはベルリンでカンブに師事、一九二七年秋帰国、国立中央大学、中央美术学院教授を歴任

21 唐一禾 一九〇五—一九四四 一九二八年春(別説一九三〇年)—一九三四年冬パリに留学、パリ美術学校ローランスに学ぶ

22 唐蘊玉 女 一九二七年渡日、石井柏亭に学ぶ、一九三〇年渡仏、パリ美術

- 学校油画系入学 帰国後、美術学校教授を歴任
- 23 孫福熙 字春苔 一八九八—一九六二 一九二〇—一九二五年フランス国立美術専科学校留学、一九三〇—一九三一年パリ大学留学、一九二五年帰国、国立西湖藝術院、国立杭州藝專教授歴任
- 24 秦宣夫 広西省桂林 一九〇六年生 一九三〇年パリ国立高等美術学校素描班入学、一九三一年四月—一九三四年夏、同校リュシアン・シモン油画教室、一九三一年ルーブル學校で西洋美術史を学ぶ、一九三二年パリ大学藝術考古研究所で西洋美術史を学ぶ、一九三四年帰国、国立北平藝術専科学校、国立藝術専科学校、国立中央大学藝術系教授を歴任
- 25 陸傳紋 字傳文 江蘇省呉県 一九〇六年生 一九三〇年渡仏、パリ国立高等美術学校入学、L.Roger Princet 及び F.Sabelle に素描、油画を学ぶ、一九三三年ベルギー、ブリュッセル皇家美術学院に入学、A.Bastien 及び Combaz に油画、図案を学ぶ、一九三五年秋帰国、蘇州美術、武昌藝專教授を歴任
- 26 陳士文 字器先 浙江省仙居 一九〇八(別説〇七) —一九八四 一九二九—一九三七年フランス留学、リヨン国立美術学院、パリ国立高等美術学校、ルーブル学校、パリ大学藝術考古学院で油画、世界美術史を学ぶ、一九三七年帰国、上海美術、新華藝專、国立英大藝術系教授を歴任
- 27 高樂宜 一九〇二—一九八六
- 28 滑田友 一九〇一—一九八六 一九三三年渡仏、一九三六—一九四八年パリ崗曉米爾美術学院卒業、国立高等美術学校彫塑系卒業、一九四八年帰国、国立北平藝術専科学校彫塑系教授
- 29 莊子曼 一八九六年生 一九三〇年渡仏、パリ国立高等美術学校入学、ルシアン・シモンに油画を学ぶ、一九三三年帰国、武昌藝專教授
- 30 常書鴻 浙江省杭県、原籍熱河滿族正紅旗 一九〇四—一九九四 一九二七年フランス留学、一九三二年リヨン国立美術専科学校卒業、同年秋、パリ国立高等美術学校入学、一九三六年九月帰国、国立北平藝專教授、造型部主任
- 31 常玉 一九〇〇—一九六六 一九一九年東京留学、一九二〇年勤工儉学の名目で渡仏、パリ、ベルリンで学ぶ、一九六六年パリで卒
- 32 黃顯之 一九〇七—一九九一 一九三一年渡仏、パリ美術学院素描班及び油画班、リヨン美術学院に留学、一九三五年帰国、桂林師範学校、重慶師範学校美術科教員、国立中央大学藝術系教授を歴任
- 33 張道藩 貴州省盤県 一八九七—一九六八 一九一九年渡英、勤工儉学、一九二一年ロンドン大学美術科入学、一九二四年ロンドン大学美術科卒業後、パリ国立高等美術学校に留学、一九二六年帰国、広東省政府農工庁秘書、南京市政府秘書長、国立青島大学教務長、浙江省政府教育長を歴任
- 34 張紫瓊 一九四七年在パリ
- 35 許士驥 安徽省歙県 一九〇〇(別説〇一、一八九九) 年生 上海美術学校卒業後、母校の助教、中央宣伝部藝術股総幹事、衛生部生理病理模型製造主任を経て、一九三〇年ドイツ、ドレスデン衛生博物院で藝用人体解剖を研究、帰国後、国立中央大学教授、教育部美術教育委員会委員を歴任
- 36 程曼叔 原名鴻壽 一九〇三—一九六一 一九二六年渡仏、リヨン美術学院入学、一九二九—一九三六年パリ国立高等美術学校彫塑系ボザール教室留学、一九三七年ごろ帰国、重慶国立藝術専科学校教授
- 37 曾竹韶 福建省廈門 一九〇八年生 一九二九年渡仏、リヨン美術学院、パリ国立高等美術学校に学ぶ、一九四二年帰国、成都藝術専科学校、重慶国立藝術専科学校教授を歴任
- 38 楊化光 熱河省 寄居北京 一九一〇(別説一九〇五) 年生 一九二九—一九三三年パリに留学、パリ国立高等美術学校油画系卒業、北平藝術専科学校、京

京華美術学院教授を歴任

39 楊仲子 一八八八年生 渡欧してフランス、ツールズ大学を卒業、更にスイス国立音楽院卒業

40 董思敏 一九四七年上海市美術館籌備処組長

41 廖新學 一九〇六一一九五八 一九三五年パリ国立高等美術学校入学、同校卒業、一九四八年帰国

42 潘玉良 原名陳秀清 原籍江蘇省鎮江 一九〇六一一九五八 一九二二年渡仏、リヨン中法大学入学、一ヶ月後リヨン国立美術専科学校入学、一九二三年

パリ国立美術学校入学、一九二五年ローマ公立美術学院入学、一九二八年帰国、上海美術専、新華藝専、国立中央大学教授を歴任、一九三七年再び渡仏、一九三七年パリで病没

43 蔣仁 一九〇八一一九八三 国立中央大学卒業後、ベルギー、フランスに留学、帰国後、国立美術専科学校西画科主任

44 劉開渠 一九〇四一九九三 一九二八年八月一九三三年六月フランス留学、パリ国立高等美術学校彫塑系に入学、Jean Boucher に学び、卒業、帰国後、国立美術専科学校教授

45 戴秉心 又名炳鑫 一九〇五一一九八〇 一九三〇年ベルギー留学、昂維斯皇家藝術研究院油画科に学ぶ、一九三六年帰国、蘇州美術専科学校、国立杭州美術専科学校教授を歴任

46 談錦瀾 女 一九一七年生 一九三七年フランス留学、パリ国立美術学院卒業後、パリ大学文學院に進む、一九四七年ごろまでに帰国

47 龐薰琴 江蘇省常熟 一九〇六一一九八五 一九二五年八月渡仏、アカデミ・ジュリアン、パリ大学フランス文化史専修班、格朗特歌米欧爾研究所に学ぶ、一九二九年末帰国、上海昌明美術学校、上海美術専科学校、広東省立藝術

専科学校教授を歴任、解放後、中央美術学院・中央工藝美術学院教授

48 王子雲 原名青路 安徽省蕭縣 一八九七一一九九〇 一九三二年パリに留学、パリ国立高等美術学校彫塑系、パリ高等裝飾藝術学校 Ecole Nationale Supérieure des Arts Decoratifs 裝飾彫塑系に学ぶ、一九三七年帰国、国立杭州

藝專彫塑系教授

49 蔡威廉 女 浙江省宜興 一九〇四一九三九 一九二二年父蔡元培と渡欧、一九一六年帰国、一九二二年ベルギー、フランスに留学、ベルギー皇家美術学院、リヨン美術学院に学ぶ、一九二七年帰国、国立西湖藝術院教授

50 江新 字小鶴 江蘇省蘇州 一八九四一九三九 一九一七年東京美術学校西洋画科卒業後、フランス留学

資料2 『中國留法比瑞同學會總會同學錄』外、留歐美術学生名単

李鐵夫 広東省鶴山 一八六九一九五二 一八八七年アーリントン美術学校入学、一九一三年ニューヨーク美術大学入学、のちニューヨーク藝術学生連盟、国際設計学院で学ぶ、一九三〇年香港に移居

馮鋼百 広東省新会 一八八四一九八四 一九〇六年メキシコ国立美術学院入学、一九一一年アメリカ、サンフランシスコト忌利(ブチーリ)美術学院、一九一三年シカゴ美術学院、のちニューヨーク学生美術研究所で学ぶ 一九二二年帰国、広州市市立美術学校教授

李毅士 江蘇省武進 一八八六一一九四二 一九〇三年東京に留学、一九〇四年渡英、一九〇七年グラスゴー美術学院入学、一九一一年同学院卒業、一九二二年グラスゴー大学入学、一九一六年同大学卒業、帰国、北京美術専門学校、上海美術専科学校、南京高等師範学校、中央大学教授を歴任

吳法鼎 河南省河陽 一八八三一一九二三 一九一三年フランス留学、パリ美

術専門学校油画科入学、一九一九年帰国、北京国立美術専門学校、上海美術専門学校教授を歴任

梁竹亭 広東省台山 一八八六一一九七三 一九一四年カナダ留学、ヴァンクーヴァー美術学校彫塑系入学、一九二八年帰国

彭沛民 湖南省長沙 一八九〇—一九七四 一九一四年英国留学、一九一七年ロンドン大学政治経済学院入学、一九一九—一九二四年エディンバラ美術学院卒業、帰国、上海美專、国立北京美術専門学校教授

余本 広東省台山 一九〇五—一九九五 一九一八年渡加、勤工儉学、一九二八年カナダ、ウイニペグ美術学校入学、一九二九年カナダ、オンタリオ州立美術学院転入、一九三六年香港でアトリエ開設、一九五六年広州帰国

曾以魯(一樓) 湖南省武岡 一八九六年生 一九一九年渡仏、勤工儉学、パリ美術専門学校卒業、一九二五年帰国、北平大学藝術学院、山東大学藝術系教授

孫福熙 浙江省紹興 一八九八一—一九六二 一九二〇年渡仏、勤工儉学、リヨン国立美術専科学校卒業、一九二五年帰国、国立杭州藝專教授

聞一多 湖北省浠水 一八九九—一九四六 原名亦多、字友三、号友山、北京清華学校卒業後、一九二二年アメリカに留学、シカゴ美術学校及びコロラド大学美術学院で油画を学ぶ、のち英文学を専攻、一九二五年帰国、国立美術専門学校教授、南京国立中央大学教授、武漢大学教授、清華大学教授を歴任

林風眠 広東省梅県 一九〇〇—一九九一 一九一九年渡仏、勤工儉学、一九二〇年一月—一九二五年冬、パリ国立高等美術学院コルモン(Cornon)教室終了

林文錚 広東省博羅 一九〇三—一九八九 一九二〇年渡仏、パリ大学でフランス文学及び西洋美術史を専攻、一九二七年帰国、国立西湖藝術院西洋美術史教授

呉大羽 江蘇省宜興 一九〇三—一九八八 一九二二年渡仏、パリ高等専科美術

術学校で Drol Rouge に油画を学び、傍らブルデルに彫刻を学ぶ、一九二七年帰国、国立杭州藝術専科学校教授

鄭可 広東省新会 一九〇六一一九八七 一九二四年渡仏、勤工儉学、一九二五年パリ国立美術学院彫塑系入学、一九二八年パリ市立工藝美術学院入学、一九三四年帰国、広州美專教授、勤勤大学建築系教授

周碧初 福建省平和県 一九〇三年生 一九二五年渡仏、パリ高等美術学校入学、アーネスト・ロランに油画を学ぶ、一九三〇年帰国、厦門美專、上海美專、国立藝專、上海新華藝專教授を歴任、一九五一年インドネシアに移居、一九五九年帰国、上海美專教授

司徒喬 広東省開平 一九〇二—一九五八 一九二八年渡仏留学、一九三〇年渡米 一九三一年帰国、嶺南大学教授

顏文樑 江蘇省蘇州 一八九三—一九八八 一九二八年三月—一九三一年十二月パリ国立高等美術学校ピエール・ローランズ教室入学、蘇州美專、中央大学教授

汪亞塵 浙江省杭州 一八九四—一九八三 一九二二年東京美術学校西洋画科卒業、一九二八—一九三一年欧州遊学

雷圭元 北京 一九〇六一一九八九 一九二九—一九三一年パリで絵画、染色、漆画を学ぶ、国立杭州藝專、成都藝專教授

韓樂然 朝鮮族 一八九八一—一九四七 一九二九年渡仏、勤工儉学、国立ルーブル美術学院卒業、一九三七年帰国

胡蠻 河南省扶溝 一九〇四—一九八六 一九二九年国立北平藝專卒業後、レニングラード藝術学院油画系に留学、抗日戦中に帰国、延安魯迅藝術文學院美術系教授

艾青 浙江省金華 一九一〇年生 一九二八年西湖国立藝術院入学、一九二九年パリに留学、一九三二年帰国、中国左翼美術家連盟に参加

符羅飛 広東省文昌 一八九六—一九七一 一九三〇—一九三六（一説に一九三八）年イタリア・ナポリ皇家美術学院卒、ローマ美術学院に学ぶ、中山大学教授
關廣志 吉林省吉林 一八九六—一九五八 一九三二年英国留学、英国皇家美術学院で水彩、水粉、銅版画を学ぶ、一九三四年帰国、国立北平藝專、燕京大学、輔仁大学教授

張充仁 上海 一九〇七年生 一九三一—一九三六年 ベルギー・ブリュッセル皇家美術学院油画高級班、彫塑系高級班に留学、一九三六年に帰国して上海でアトリエを開設、之江大学、上海美術專教授

張悟眞 湖南省瀏陽 一九〇一年生 一九三二—一九三六年 国立高等美術專科學校留学、一九三八年帰国、『新華日報』美術科主任

謝投八 福建省廈門 一九〇二年生 一九二五年フィリッピン大学美術系卒業、一九三四年パリ、アカデミー・ジュリアン卒、廈門美術、国立杭州藝專教授

陳學書 広東省文昌 一九一五年生 一九三六年イタリア・ローマ皇家美術学院入学、一九三九年同学院卒、一九六五年帰国

蕭淑芳 女 広東省中山県 一九一一年生 一九三七年渡欧、彫塑を学ぶ、一九四〇年までに帰国

沙耆 浙江省鄞県 一九一四年生 一九三七年ベルギー国立皇家美術学院入学、一九三九年同学院卒業、一九四六年帰国

陳曉南 江蘇省溧陽 一九〇八年生 一九四六（四七）—一九五〇（四九）年ロンドン中央工藝美術学院で銅版腐蝕画を研究、一九五〇年帰国、中央美術学院教授

劉文清 雲南省昆明 一九一八—一九八〇 一九四七年パリ画院プラーロン教室留学、一九四九年帰国

王熙民 山東省烟台 一九一七年生 一九四七年渡仏、パリ国立美術学院留学

留欧美術学生

吳冠中 江蘇省宜興 一九一九年生 一九四七年春—一九五〇年巴黎国立高等美術学院蘇尔皮（スフォルピ）教授（油画）教室修了、中央美術学院教授
梅健鷹 広東省台山 一九一六年生 一九四八—一九五一年アメリカ・シアトル・ワシントン州立大学美術系、ニューヨーク・コロンビア大学留学

王靜遠 女 遼寧省海城 一八九五年生 フランスに留学、国立美術專科學校卒業、リヨン大学卒、国立杭州藝專、北平藝專教授

方君璧 女 福建省福州 一八九八年生 パリ、アカデミー・ジュリアンに学ぶ、ボルドー美術学校、パリ国立高等美術学校

李景凱 綏遠省 一九一一年生 パリ国立工藝学院染織系卒、陝西省立工業專科學校染色図案科、北平藝專教授

洪青 一九一三—一九七九 フランス、ベルギーに留学